

# 平成30年度から令和2年度における入館者数の統計解析 —中央博物館の来館者変遷の傾向およびコロナ禍の影響など—

奥田昌明

千葉県立中央博物館  
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2  
E-mail: m.okd10@pref.chiba.lg.jp

(受付日：2020年11月7日，受理日：2021年1月10日)

**要旨** 平成30年度から令和2年度にかけての千葉県立中央博物館の入館者数を解析した。令和元年度企画展（ほにゅうるい）は、平成29年度企画展（きのこワンダーランド—第1期）と同程度に近い来館者状況を示していた。令和元年度春の展示（うめ・もも・さくら）およびチバミュージアムフェスタ2020～千葉県立美術館・博物館展覧会～はコロナ禍の影響を強く受けたが、来館者の減少は当初懸念していたほどは大きくなく、夏以降に本館入館者数は回復した。令和元年度の人数減については台風被害による影響が大きかったが、基本的に前年度比であるため、前年にあたる平成30年度特別展（恐竜ミュージアムinちば）の集客が大きすぎたことも要因であろう。今後の総入館者数については、令和2年度は4万人台までの減少が予想されるが、コロナ後の回復目標としては平成29年度の12万人台が適切と思われる。

**キーワード**：入館者数，博物館，統計データ，コロナ禍，台風被害

千葉県立中央博物館の総入館者数は平成15年度に193,324人を記録して以降、減少傾向にある。とくに令和元年度は入館者数が30%減となり（前年度比70.4%）、平成元年の開館以来、五指に入る下げ幅となった。当館の総入館者数で前年度比70%台は、他には平成21年度、平成26年度、平成29年度の3度のみであり、平成25年以降に大きな減少が集中している。さらに本館2F（券売所より内側エリア）に限るなら、令和元年度の入場者数は前年度比67%という低い値であり、同75%の生態園と併せてようやく70%台に乗る水準であった。同じ令和元年度、ミュージアムパーク茨城県自然博物館（以下、茨城博）は前年度比98%（ミュージアムパーク茨城県自然博物館, 2019）、同じく神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、神奈川博）は94%（神奈川県立生命の星・地球博物館, 2019）、群馬県立自然史博物館（以下、群馬博）は93%だったので（群馬県立自然史博物館, 2019）、なぜ当館のみこれほど減少が大きかったかについては検証を要する。

さらに令和2年に入り、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行による災難・危機的状況（いわゆるコロナ禍）が発生した。公立学校の休校に合わせる形で当館も3月3日から休館に入り、5月26日ようやく再開館したが、その後も感染予防対策としての消毒作業のため開館時間を遅らせ、またいわゆる3密を避けるため団体来館を制限するなどの措置が現在も続いており、本稿

執筆時点（2020年10月）では令和2年度の総入館者数が最終的にどうなるかは、予断を許さない状況にある。

コロナ禍は現在も継続中であるが、本稿では、年度途中ながら速報として2020年9月30日までの統計データを示す。コロナ禍の影響に関しては、詳細な分析は別に教育普及課から出るのを待つとして、ここではおおまかな傾向を示す。コロナ禍以外の年度については、前報（奥田, 2019）の執筆以降に記録された平成30年10月以降の来館者動向について重点的に記す。

加えて本稿では、埼玉県立自然の博物館（以下、埼玉博）の統計データを参考値として紹介する。埼玉博を選んだ理由は3つある。（1）関東地方における自然誌系の主要他館の一つであること。（2）当館において数年以内に起こると予想される入館者動向と類似した変化を含んでいること。（3）実際に埼玉博の統計データ（とくに日ごとの詳細データ）が入手可能であったこと。筆者は過去2回に亘って入館者数の統計分析を行い（奥田, 2018; 2019）、当館の来館者動向については概ね把握しているつもりだが、「それでは他館はどうか」という疑問は常に持っていた。例えば、当館では平日の入館者数が土日と比べて2割にも満たないが、これが当館だけの現象であり改善を要するのか、他館でも同様であり懸念するに及ばないのかは、他の博物館のデータと比較して初めてわかる。とはいえ、博物館が年報等を通じて公表する入館者数は通年合計のみであることが多いので、詳細

な（たとえば曜日ごとの）来館者数の比較を行うことは通常できない。

そのような折、博物館リニューアルに関する勉強会が平成31年3月に当館にて開かれ、埼玉博の北川博道学芸員が講師として来館された。講演内容については、「昭和56年にオープンした埼玉博は平成10年頃から来館者が急減し、現在の当館と似た苦境を経験したが、平成24年のリニューアル・オープンを機に入館者数がV字回復した」という内容であり、当館で今後数年以内に起こり得る変化を知る上で興味をそられるものであったと共に、筆者にとっては、かねてより求めていた他館の詳細な統計情報に触れられる貴重な機会でもあった。そこで講演終了後に北川氏に事情を話し、埼玉博の日ごとデータ（1日単位で年齢層等が区別された入館者データ）をご提供いただけないか打診したところ、快諾を得ることができたので、「当館と比較可能な関東地方の自然誌系の主要他館」として埼玉博を紹介する。また、ご提供いただいた埼玉博の統計データは要点のみを抽出し、参考資料として巻末に付す（補表1）。

なお、本稿は令和元年度に望月館長（当時）より指示を受け、令和2年度の資料管理研究科における研究業務の一部として行ったものである。とはいえず術論文である以上、本稿に記した考察は著者の個人見解であり、責任は館ではなく著者一人が負うものである。

## 1. ほにゅうるい展・オリパラ展の入場者数およびコロナ禍の影響

奥田（2019）の執筆以降、平成30年10月から令和2年9月までの間に実施された企画展示のうち、夏季に行われたものは以下2つである。（1）令和元年度企画展「ほにゅうるい」（以下、ほにゅうるい展と記す。なおキャッチ

コピーは『陸のモフモフ！ 海のツルツル？ あつまれ「ほにゅうるい」』であった）、（2）チバミュージアムフェスタ2020～千葉県立美術館・博物館展覧会～「オリンピック・パラリンピック」と千葉のスポーツ史（以下、オリパラ展と記す）（図1）。

R1ほにゅうるい展は、キャッチコピーやチラシ図柄をみても判るとおり、子供にもわかりやすく哺乳類の魅力を伝える展示であった。展示物としてはツノシマクジラやホッキョクグマなど、多数の剥製標本や骨格標本が展示された。オリパラ展は、千葉県教育庁教育振興部文化財課により県立美術館・博物館の合同企画展示事業として行われた。関連事業であるパネル巡回展は2019年8月の大根分館を皮切りに、分館海の博物館、県立美術館等で開催されたが、当館では巡回したパネルを使用せず、独自に実物資料を伴う展示会として2020年2月22日から開催した。当初は5月10日までの会期であり、7月からは令和2年度企画展「ちばの縄文-貝塚からさぐる縄文人の暮らし-」（以下、ちば縄文展）が開催される予定であったが、同年3月より本格化したコロナ禍によりちば縄文展が10月開催に順延されたのに伴い、オリパラ展は夏季まで延長された後、2020年8月31日に終了した。

これら企画展示の集客状況を図2に示す。図2は企画展示スペースを含む本館2階の入場者数（券売所通過人数）を「日ごとデータ」として示したもので、1週間単位の増減周期が如実に現れている（下段灰色は一般・高大生など有料者数、上段黒棒は65歳以上・中学生以下など無料者数）。なお比較のため、平成29年度のデータと、年代は飛ぶが平成22年度のデータも参考値として示した。

まず図2の中で目立つのは、平成30年度特別展「恐竜ミュージアムinちば」（以下、恐竜ちば展）の入館者数である。これが過去に当館で行われた企画展示の中で突



図1. 令和元年度ほにゅうるい展と中央博物館で実施したオリパラ展の配付チラシ。

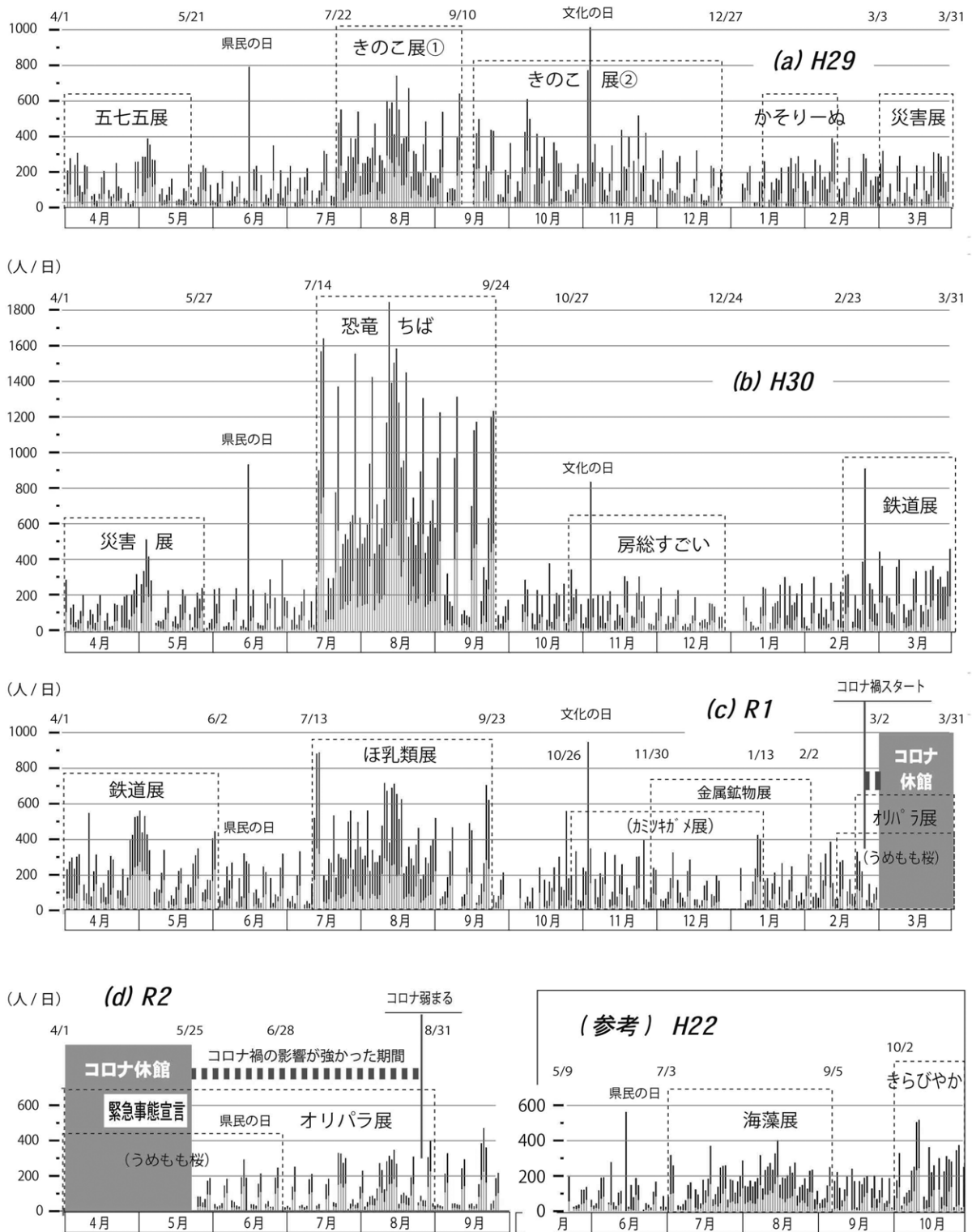


図2. 平成29年度以降の千葉県立中央博物館本館2Fの入館者数(券売所通過人数)。灰色:有料人数。黒:無料人数。カッコ書きの2展示(R1カミツキガメ展, R1うめもも展)は第2企画展示室のみを使った小規模展示。(奥田, 2019図2に情報追加)

出したものであったことは奥田(2019)でも述べたが、ほにゅうるい展については、平成29年度企画展「きのこワンダーランド—第1期」(以下きのこ展①)と同レベルの入場者を得ていたことに注目されたい(ほにゅうるい展の期間にあたる令和元年9月には台風被害があったが、その影響については後で述べる)。きのこ展①の入館者数は、過去に当館で行われた企画展の中でも上位だった(奥田, 2019)。従って、令和元年度の総入館者数

が激減したことは最初に述べたが、それは同年に行われた企画展示の質が低かったからではなく、別の理由によるものであると考えられる。

コロナ禍にさらされたオリパラ展の入館者数が例年の季節展に比べて少なかったことは当然であろうが、予想外だったのは、それが当初懸念されていたほど大きな減少ではなかった点である。もちろん減ってはいるのだが、令和2年6～8月における入館者数は、参考値として示し



た平成22年度と同水準である。細かく検討していくと、コロナ禍による閉館期間（2020年3月2日～5月25日）は当然ながら来館者数がゼロとなるが、6/2（火）の再開後においては、平日の人数こそ20～30人にすぎないが、週末には常に増加して150～200人が当館を訪れている。とくに7月以降では300人越えの盛況を示す期間も認められる。

この入館者水準は、参考として付した平成22年度の状況とよく似ている。当館の入館者数は、年度によってかなり大きな変動がある。表1は統計データが電子化されて残っている平成19年度以降の企画展示の一覧である

が、平成22年度企画展「海藻—35億年の旅人」（以下、海藻展）および平成30年度の恐竜ちば展では、1日平均の入場者数で5倍近い開きが生じている（海藻展173人/日、恐竜ちば展754人/日）。オリパラ展に関しては、平日の入場者数が異常に少なくなっている点が平成22年度とは異なるが（図2）、これは新型コロナウイルスの感染予防対策のため団体来館の受入を制限したことが主な原因であると考えられる。千葉県立中央博物館における団体客は、多くが校外学習等で当館を訪れる小学校団体であり、それは平日に集中するので、団体来館の受入を制限すれば平日の入場者数が激減する。言い換えれば、コ

表1. 平成19年度以降に千葉県立中央博物館で開催された企画展示。（奥田, 2019表1に情報追加）

|                     | 年度   | カテゴリ     | 略称                           | タイトル                               | 入場者数  | （人）（人/日）   |                   | 会期   | 会期日数 | 土日祝平均 |
|---------------------|------|----------|------------------------------|------------------------------------|-------|------------|-------------------|------|------|-------|
|                     |      |          |                              |                                    |       | 1日平均       | 会期                |      |      |       |
| 奥田<br>(2018)<br>掲載分 | H19  | 春の展示     | 山岳画                          | 山岳画（下半期のみ・平日に巨大団体あり）               | 12230 | 245        | 4/1～5/27          | 50   | 299  |       |
|                     | H19  | 企画展      | 熱帯展                          | 化石が語る熱帯の海                          | 21617 | 379        | 6/30～9/2          | 57   | 559  |       |
|                     | H19  | 秋の展示     | 食虫植物                         | 食虫植物の世界—虫を食べる植物たち—                 | 13738 | 191        | 10/6～12/27        | 72   | 280  |       |
|                     | H19  | 冬の展示     | 巡回展1                         | 房総発掘ものがたり                          | 5622  | 148        | 1/19～3/2          | 38   | 231  |       |
|                     | H19  | 春の展示     | 野鳥展                          | 砂浜の野鳥たち—九十九里の景観とともに                | 12033 | 174        | 3/22～6/8          | 69   | 213  |       |
|                     | H20  | 企画展      | 大昆虫展                         | 大昆虫展 一虫のせかいほふしぎがいっぱい—              | 35792 | 651        | 7/5～8/31          | 55   | 912  |       |
|                     | H20  | 合同事業     | 仏像仏画                         | 千葉県の指定文化財展 房総の仏像・仏画                | 7806  | 300        | 9/20～10/19        | 26   | 336  |       |
|                     | H20  | 企画展      | 発掘列島                         | 県美博合同 「発掘された日本列島2008（縄文の造形—縄文学入門）」 | 7333  | 193        | 11/1～12/14        | 38   | 239  |       |
|                     | H20  | 記念展示     | ブータン展                        | 中央博物館20年の歩み/ヒマラヤの神秘—ブータンの自然        | 5639  | 176        | 1/17～2/22         | 32   | 293  |       |
|                     | H20  | 春の展示     | クモ展                          | クモ・蜘蛛・くも —8本足の糸つむぎ職人—              | 16880 | 228        | 3/7～5/31          | 74   | 320  |       |
|                     | H21  | 企画展      | 多様性展                         | 生物多様性1：生命のにぎわいとつながり                | 13362 | 234        | 7/4～8/31          | 57   | 307  |       |
|                     | H21  | 秋の展示     | 縄文展                          | 生物多様性2：人と自然のかかわり 縄文の躍動             | 9526  | 187        | 9/26～11/23        | 51   | 217  |       |
|                     | H21  | 冬の展示     | 巡回展2                         | 房総発掘ものがたり —地下50cm、文字の世界—           | 5575  | 151        | 1/9～2/21          | 37   | 199  |       |
|                     | H21  | 春の展示     | 地衣展                          | 雲南の地衣類                             | 8852  | 181        | 3/13～5/9          | 49   | 231  |       |
|                     | H22  | 企画展      | 海藻展                          | 海藻、35億年の旅人                         | 10895 | 173        | 7/3～9/5           | 63   | 244  |       |
|                     | H22  | 秋の展示     | きらびやか                        | きらびやかな世界の昆虫たち —多様な形と色彩—            | 11022 | 212        | 10/2～11/28        | 52   | 286  |       |
|                     | H22  | 冬の展示     | 巡回展3                         |                                    | 5161  | 161        | 1/22～2/27         | 32   | 228  |       |
|                     | H22  | 春の展示     | 水鳥展                          | 千葉県野鳥図鑑 —水鳥編—                      | 13128 | 193        | 3/19～6/5          | 68   | 267  |       |
|                     | H23  | 企画展      | 山伏展                          | 出羽三山と山伏                            | 16088 | 287        | 7/9～9/4           | 56   | 393  |       |
|                     | H23  | 秋の展示     | 砂展                           | 砂のふしぎ                              | 11309 | 202        | 10/1～12/4         | 56   | 226  |       |
|                     | H23  | プレ展示     | アロ展                          | 恐竜アロサウルスとその時代の生き物たち                | 19867 | 261        | 1/12～4/8          | 76   | 485  |       |
|                     | H23  | 春の展示     | 芽ばえ展①                        | 芽ばえ①（単独実施の期間）                      | 6366  | 152        | 3/17～5/27         | 42   | 245  |       |
|                     | H23  | 春の展示     | 芽ばえ展②                        | 芽ばえ②（アロ展とのダブル期間）                   | 6917  | 346        |                   | 20   | 480  |       |
|                     | H24  | 企画展      | カモシカ展                        | シカとカモシカ—日本の野生を生きる—                 | 16755 | 243        | 7/7～9/17          | 69   | 359  |       |
|                     | H24  | 特別展      | 恐竜ティラノ                       | ティラノサウルス—肉食恐竜の世界                   | 25214 | 442        | 10/20～12/24       | 57   | 830  |       |
|                     | H24  | 冬の展示     | 巡回展4                         |                                    | 5747  | 151        | 1/12～2/24         | 38   | 246  |       |
|                     | H24  | 春の展示     | ナッツ展                         | ナッツ&ベリー —千葉の名産から世界の逸品まで—           | 9723  | 216        | 3/16～5/12         | 45   | 276  |       |
|                     | H25  | 地域連携展    | 音（プレ）                        | 世界の音を聴こう！                          | 12404 | 282        | 7/20～9/1          | 44   | 355  |       |
| H25                 | 企画展  | 音展       | 音の風景—うつつりかわる自然と環境を未来に伝える—    | 9296                               | 186   | 10/5～12/1  | 50                | 229  |      |       |
| H25                 | 冬の展示 | 鉱物展      | 北川鉱物コレクション展                  | 5373                               | 145   | 1/11～2/23  | 37                | 184  |      |       |
| H25                 | 春の展示 | 水辺展      | 水辺の記憶—写真家 林辰雄のまなざし—          | 10690                              | 170   | 3/8～5/25   | 63                | 215  |      |       |
| H26                 | 企画展  | 図鑑展      | 図鑑大好き！～ダーウィンから始まる100の図鑑の話～   | 17276                              | 213   | 7/19～10/13 | 81                | 305  |      |       |
| H26                 | 秋の展示 | どんぐり     | どんぐりの世界                      | 8005                               | 211   | 11/1～12/14 | 38                | 247  |      |       |
| H26                 | 春の展示 | 貝塚展      | 世界の遺跡から出土した貝 現生標本からみる色や形・利用法 | 8872                               | 158   | 3/7～5/10   | 56                | 228  |      |       |
| H27                 | 企画展  | 妖怪展      | 妖怪と出会う夏 in Chiba 2015        | 29566                              | 394   | 7/11～9/23  | 75                | 641  |      |       |
| H27                 | 秋の展示 | 水草展      | 水草 ふしぎがいっぱい、水辺のいろいろ          | 12061                              | 140   | 10/31～2/14 | 86                | 167  |      |       |
| H27                 | 冬の展示 | *刀展      | 新指定文化財第二部 日本刀の鍛錬 刀匠 松田次泰の世界  | 5179                               | 199   | 1/30～2/28  | 26                | 263  |      |       |
| H27                 | 春の展示 | 石材展      | 石材が語る 火山がつくった日本列島            | 11982                              | 162   | 3/12～6/5   | 74                | 225  |      |       |
| H28                 | 企画展  | 深海展      | 驚異の深海生物—新たな深世界へ—             | 38060                              | 604   | 7/9-9/19   | 63                | 920  |      |       |
| 奥田<br>(2019)<br>追加分 | H28  | 秋の展示     | 屏風展                          | 屏風絵の世界 —職人尽絵を中心に—                  | 8673  | 155        | 10/22～12/25       | 56   | 165  |       |
|                     | H28  | 冬の展示     | チーバくん展                       | 千葉県連携企画 まるごとチーバくん展 ありがとう10周年       | 5169  | 287        | 1/11～1/31         | 18   | 487  |       |
|                     | H28  | 春の展示     | 五七五展                         | 五七五で自然を切り取る—生態園を子どもの目で詠むと—         | 9864  | 145        | 3/4～5/21          | 68   | 217  |       |
|                     | H29  | 企画展      | きのご展①                        | きのごワンダーランド—第1期—（子どももたのしめる）         | 16690 | 334        | 7/22～9/10         | 50   | 491  |       |
|                     | H29  | 企画展      | きのご展②                        | きのごワンダーランド—第2期—（大人もたのしい）           | 19962 | 227        | 9/16～12/27        | 88   | 326  |       |
|                     | H29  | 冬の展示     | かそりーぬ                        | 祝特別史跡指定—かそりーぬとみる加曾利貝塚              | 4947  | 183        | 1/13～2/12         | 27   | 249  |       |
|                     | H29  | 春の展示     | 災害展                          | ところ変われば備えも変わる あなたの街と自然災害           | 11898 | 161        | 3/3～5/27          | 74   | 243  |       |
| H30                 | 特別展  | 恐竜ちば     | 恐竜ミュージアム in ちば               | 52745                              | 754   | 7/14～9/24  | 70                | 1160 |      |       |
| 本稿追加分               | H30  | 秋の展示     | 房総すごい                        | 房総丘陵はすごい —調べてびっくり、新発見の数々—          | 7277  | 140        | 10/27～12/24       | 52   | 202  |       |
|                     | H30  | 春の展示     | 鉄道展                          | 千葉の鉄道物語 —線路が拓いた「観る・住む・遊ぶ」—         | 21854 | 251        | 2/23～6/2          | 87   | 374  |       |
|                     | R1   | 企画展      | ほにゅるい展                       | ほにゅるい —陸のモフモフ・海のツルツル—              | 24165 | 361        | 7/13～9/23         | 67   | 502  |       |
|                     | R1   | トピックス展   | 金属鉱物展                        | 金属鉱物資源展                            | 7088  | 145        | 11/30～2/2         | 49   | 239  |       |
|                     | R1   | 秋の展示     | *カミツキガメ展                     | カミツキガメ —どのような生きものか いるとなぜいけないのか—    | 10744 | 173        | 10/26～1/13        | 62   | 250  |       |
| （コロナ禍）              | R1   | 春の展示     | *うめもも展①                      | うめ・もも・さくら①（単独実施の期間）                | 978   | 163        | 2/15～2/21         | 6    | 273  |       |
|                     | R1   | 春の展示     | *うめもも展②                      | うめ・もも・さくら②（オリパラ展とのダブル期間）           | 4232  | 111        | 2/22～6/28         | 38   | 188  |       |
|                     | R2   | フェスタ2020 | オリパラ展①                       | 「オリンピック・パラリンピック」と千葉のスポーツ史①夏休み期間    | 3136  | 196        | 8/8～23            | 16   | 248  |       |
|                     | R2   | フェスタ2020 | オリパラ展②                       | 「オリンピック・パラリンピック」と千葉のスポーツ史②夏休み以外    | 8796  | 111        | 2/22～8/7, 8/24～31 | 79   | 214  |       |

灰色は夏季の展示

\*は第2企画展示室のみの小規模展示

※県民の日と文化の日は、土日祝平均から除く

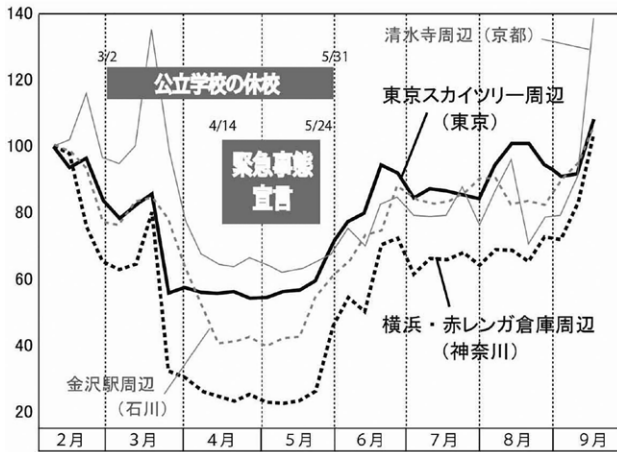


図3. 令和2年における関東地方周辺の行楽地における人出の推移。(日本経済新聞9月23日付電子版より微修正)

コロナ禍がなければ小学校団体は平年並みに来館したはずなので、令和2年度の平日の入館者数は平成22年度と同程度になった可能性が高い。

コロナ禍がなかった場合のオリパラ展の集客がどの程度のものであったのか、推定する。鍵は8月最後の週末(8月29日～30日)にある。図3は関東地方周辺の主要な観光地における人出の推移である(日本経済新聞電子版, 2020)。よく知られているように、2020年の新型コロナウイルス感染者数の増加は2月末頃から顕著になり、4月14日～5月24日の緊急事態宣言をピークとして7月末頃まで深刻な状況が続いたが、8月中旬以降は行楽地を中心に人出が戻り、東京スカイツリーや横浜・赤レンガ倉庫周辺では3月以前の水準が回復している(日本経済新聞電子版, 2020)。

以上を当館の状況と照らし合わせると、オリパラ展では会期の最後に来館者数が急増し、8月29日(土)に304

人、8月30日(日)には400人の来館者が訪れている(図2)。これは、きのこ展①およびほにゅうるい展の最終日と比べても7掛けの値なので、コロナ禍がなかった場合のオリパラ展の入場者数は少なく見積もっても、きのこ展①・ほにゅうるい展の7掛け程度はあったとみられる。なお、8月末もまだコロナ禍の影響が残っていた可能性も考えられるが、図3によれば関東地方の観光地の人出は8月下旬には緊急事態宣言の発令前の水準に戻っているので、その可能性は低いものと思われる。

コロナ禍の影響をより大きく受けた展示としては、オリパラ展よりもむしろ令和元年度春の展示「うめ・もも・さくら」(以下、うめもも展)のほうが深刻であった。うめもも展(図4右)は2020年2月15日にオープンしたが、3月3日には休館となり、5月26日の再開後もコロナ禍の影響を受けたまま6月28日にひっそりと閉幕したため、コロナ禍の影響を受けなかった期間は最初の数日しかない。オリパラ展とうめもも展は会期の多くが重なっているため、会期の重ならなかった単独期間(2月15日～21日)を「うめもも展①」、オリパラ展と重なったダブリ期間(2月22日～6月28日)を「うめもも展②」として区別すると、うめもも展②の開催期間では1日平均の入館者数は「111人」となり(表1)、オリパラ展②と並んで平成19年度以降の企画展示の中では最低となる(図5a)。なお、うめもも展と会期の重ならなかった単独期間を「オリパラ展①」、会期の重なった期間を「オリパラ展②」として区別したことはうめもも展の場合と同じである。

とはいえ、コロナ禍の下では入場者数が「0人」となる事態も想定されたため、他の企画展示の集客から大きく外れるような結果にならなかったのは、意外ともいえる結果である。コロナの影響がまだほとんどなかったと考えられるうめもも展①(2月15日～21日)の値をみて



図4. 令和元年度春の展示(鉄道展)と令和2年度春の展示(うめもも展)の配付チラシ。

みると、1日平均の入場者数は163人となり（表1）、土日祝のみの平均を見るならば273人という高い値を示している。一般に2月中～下旬は“梅の季節”（県立青葉の森公園で開花する梅を見るための来訪者が増える季節）であり、図2を見てもうめも展の開催前から200人以上の入館者が各週末には来ているので、この数字がうめも展だけによる集客であったとは思われない。とはいえ、図5bに示した企画展示のほとんどが第1企画展示室を使った大型展示であったのに対し、うめも展は第2企画展示室だけを使った小規模展示だった点も考慮すると、うめも展（とくに①）は過去の企画展示（企画展

および季節展）の中では健闘しているという見方はできるかと思う。

2. 過去14年間の企画展示からみる当館の入館者傾向

次に、コロナ禍の影響がなかった年度について見てみよう。他に図2の中で集客力が高かった季節展（秋～春の展示）としては、平成30年度春の展示「千葉の鉄道物語 ～線路が拓いた観る・住む・運ぶ」（以下、鉄道展）（図4左）があげられる。令和元年度において鉄道展は夏の企画展に迫る入場者があり（図2）、1日平均で見ると251人/日、土日祝平均の値で見ると374人/日となる

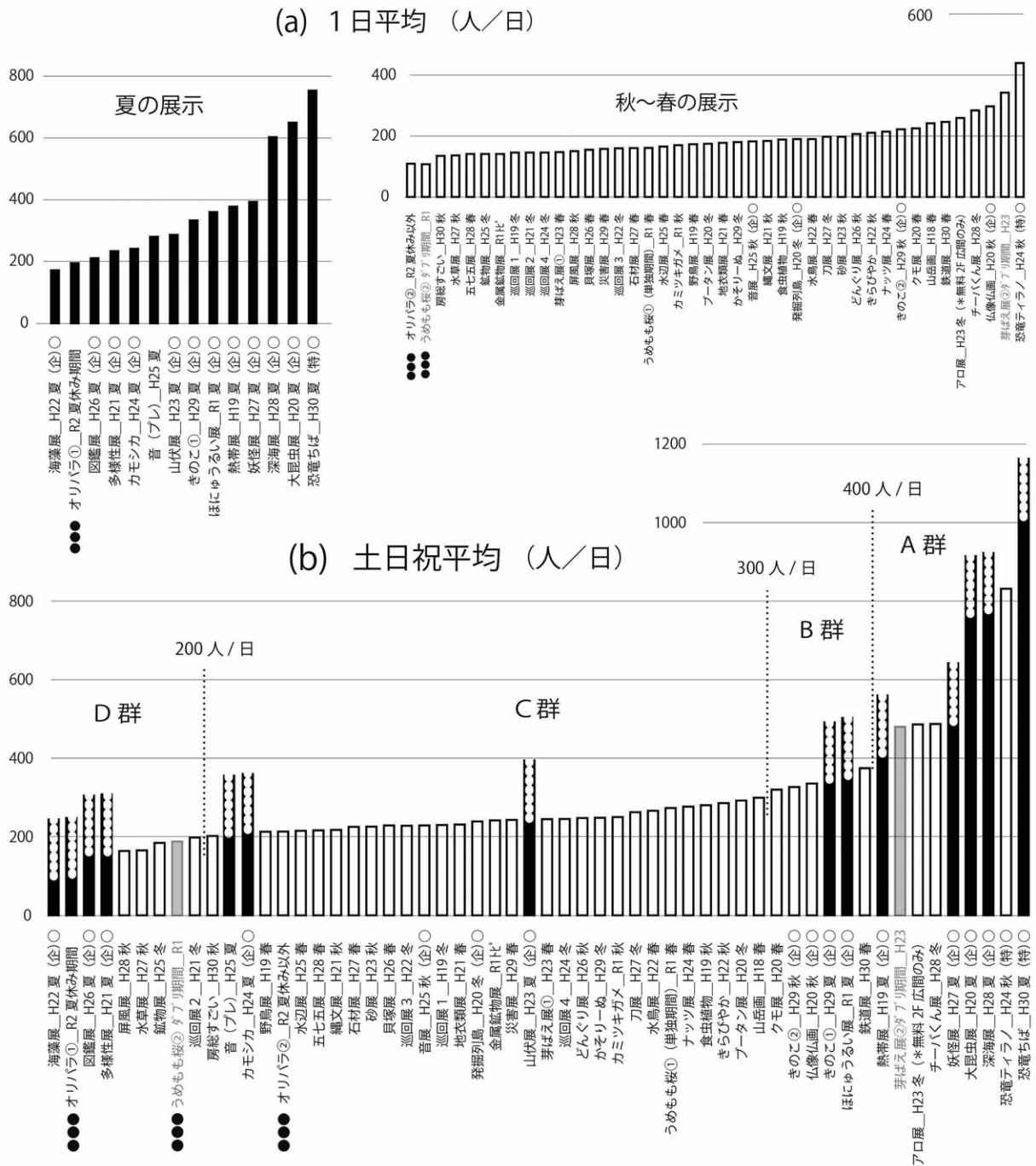


図5. 平成19年度以降に千葉県立中央博物館で実施された企画展示の入場者数。(a) 1日平均の値。(b) 土日祝平均の値。黒棒は夏の展示、白棒は季節展（秋～春の展示）。黒棒の中の太い白点線は夏の展示に乗る150人分のゲタ。“○”は企画展または特別展。●●●●はコロナ禍の影響を受けた展示。(bは奥田, 2019図5に情報追加)



(表1). 令和元年4月27日(土)～5月6日(月)が天皇陛下即位礼に係る10連休だった点を差し引いても、鉄道展は当館で過去に行われた季節展の中で5本の指に入る入場者数だったといえる(図5aおよびb).

平成29年度以前の企画展示からわかる当館の入館者傾向については奥田(2019)で詳述したが、本稿の考察に絡む部分もあるので簡単に要点を再掲する。一般に企画展示の来場者数は1日あたりの平均人数で計られることが多いが、異なる企画展示の集客力を比べるには1日平均の人数よりも「土日祝平均」のほうが適しており、平日における入館者数は積算合計から除くほうが望ましい。平日の来館者の多くが「通勤・通学等を要しない大人」あるいは「校外授業の一環として来館する小学校団体」などにほぼ限られるため、企画展示の有無とはあまり相関がないからである。一般に、学休期(春休みや夏休みなど)以外の平日には、たとえば魅力のあるコンテンツを企画しても集客は伸びないことが多い。図2では、恐竜ちば展のオープン後も最初の土日が終われば入場者数が急減したり、R1鉄道展でも春休みとそれ以外の期間で平日の入館者数が大きく違うなどの傾向が読み取れる。なお、6月15日の県民の日には例年1000人近い来館者が見込まれるが、これは「入場無料」のサービスよりも、県内の公立学校が休みになる効果のほうが大きいと考えられる。根拠としては2020年の事例を示すと、同年6月15日(月)は県民の日であったので当館は無料開放されたが、当日の来館者数は188人にすぎなかった。令和2年における県民の日は、コロナ禍による休校の遅れを取り戻すべく県内の多くの小学校が休みでなくなったからである。「コロナ禍の最中であったのだから来館者が前年比で減少するのは当然だ」という指摘は正しくない。なぜなら、その前日にあたる2020年6月14日(日)には、通常の有料入館であったにもかかわらず292人も来館者が訪れているからであり(図2)、令和2年度県民の日の入館者減少はコロナ禍が原因ではないことを示している。このように平日の来館者数は、市民が学校や会社を休めるか、また校外学習の一環として大きな小学校団体が来てくれるかといった社会の事情に影響される部分が多いので、入場無料の日を設けたり、イベントを行ったりといった館側の努力があまり関係しない要素であると考えられる。

もう一点、土日祝平均をとることのメリットとしては、夏期の企画展あるいは特別展および他の季節展(秋～春の展示)を同一の組上で比較できる利点があげられる。1日平均で見ると、夏季の展示は秋～春の展示より常に数値においてまさっているが(図5a)、これは会期に夏休み期間を含むからであり、単純な比較はできない。この問題を回避するよい方法は、土日祝のみの積算人数に対して1日あたりの平均をとることである(土日祝平均)。平日を含まない値であれば、学休期(とくに冬休み～春休み)であろうがなかろうが、入館者数の差によるバイアスは排除されるからである。

ところが、夏休みのみに関しては、正確な理由は不明

だが、この原則があてはまらない。図2を見ても、7月下旬～8月の土日は、他の季節の土日より常に来館者が多くなっている(平成29年においては7月下旬～8月にきのこ展①が、9月～12月にはきのこ展②が同じ規模で行われていたにもかかわらず、土日における入館者数は有意に前者のほうが多かった)。なお、これはお盆による帰省者は除いた上での結果である(きのこ展①の会期からお盆前後(8/11祝～8/20日)を除いた土日祝平均は459人、対してきのこ展②の土日祝平均は326人(表1)、文化の日は除く)。すなわち、夏休み期間中の土日における入館者数には、他の季節の土日にはない値が“ゲタ”のように乗っており、そのゲタの大きさは約150人/日であることがわかっている(奥田, 2019)。従って、夏の展示の土日祝平均から「150」を引いた上で秋～春の展示と比較することで、当館で過去に行われた全企画展示の入館者数を同一のグラフ上で比較することが可能になる。

なお、企画展示の入場者数における土日祝平均を計算する場合には、11月3日の値は合計値から除くことが望ましい。文化の日に美術館・博物館の入場料が無料になる制度は平成19年度以前から続いているが、当館の場合、11月3日の値は突出した異常値を示しており、企画展示の集客とほとんど相関がない。なお、当館では文化の日には大型イベントである自然誌フェスタが開催されていることも、入場者数が多い一因にはなっていると思われる。なお、県立博物館の入場料が無料になる制度は、他にも6月15日(千葉県民の日)に行われているが、企画展示の会期が6月にかかることはほとんどないので、県民の日が土日祝平均の値に影響するケースはほとんどない(6月15日が土日にあたり、かつ企画展示の会期に含まれる場合には、県民の日の値も土日祝平均から省くべき)。

さて、企画展と季節展を同一のグラフにまとめた上で検討すると(図5b)、秋～春の展示では1日平均(図5a)および土日祝平均(図5b)との間でほとんど差がないのに対し、夏の展示に関しては、図5bでも上位を保つ展示と、図5bでは下位に下がる展示に二極化する。前者にはH30恐竜ちば展、R1ほにゅうるい展、H29きのこ展①などが、後者にはH22海藻展、H26図鑑展、H21多様性展などが該当する。

ただし、図5bに示された集客力の順位は、実際に制作された“展示の良し悪し”を反映するものではない。来館しなかった人が実際の展示をみることはないからである。来館しなくても展示会場の様子を知ることができる“知人からの口コミ”等の効果は、全体ではあまり大きくない。表2は、R1ほにゅうるい展の終了後に集計されたアンケート結果の一部であるが、「この展示を何で知ったか」に対する回答は、ポスター及びチラシの合計が53%、当館ウェブサイト、行事案内、県民だより、新聞・雑誌の合計が16%であり、「家族・先生・知人から聞いた」は9%にすぎなかった。ときおり「よいものを展示すれば客は来る」(客が来ないのはよい展示資料がないからだ)という会話が交わされることがあるが、会期を区切

表2. 令和元（2019）年度企画展「ほにゅうるい」アンケート結果の一部。回答は「知らなかった」71件を除いた409件。複数回答あり。%は展示担当の了承のもと筆者が計算（小数点2桁は四捨五入）。

この展示を何で知ったか

| n=409         | 回答数 | %     |
|---------------|-----|-------|
| 新聞            | 16  | 3.9   |
| 雑誌            | 1   | 0.2   |
| テレビ           | 1   | 0.2   |
| ラジオ           | 1   | 0.2   |
| ポスター          | 49  | 12.0  |
| チラシ           | 169 | 41.3  |
| 当館のウェブサイト     | 37  | 9.0   |
| 他のウェブサイト      | 1   | 0.2   |
| SNS           | 49  | 12.0  |
| 当館の行事案内       | 5   | 1.2   |
| 県民だより         | 5   | 1.2   |
| 以前来館して知った     | 12  | 2.9   |
| 家族・先生・知人から聞いた | 37  | 9.0   |
| その他           | 11  | 2.7   |
| 無回答           | 15  | 3.7   |
| 合計            | 409 | 100.0 |

られた企画展示に関するかぎり、それは違っており、実際の展示物を見なくてもわかるポスター・チラシ等の広報物から、市民の方々は「行くか行かないか」の判断をしているものと思われる。

なお、近年ではウェブページ上に展示のメイキング風景を掲載したり、twitterで展示制作状況を紹介するなどの新しい試みも行われているが、表2を見るかぎり「当館ウェブサイトで知った」は9%、「SNSで知った」は12%となっているので、上記のような新しい試みは、令和元年度時点ではまだ全体的な来場者動向に影響するほどではないことが多いようである（むしろ平成以前でもSNS等で大きな盛り上がりを見せた企画展はあったかもしれ

ないし、今から数年後にはSNS等による口コミが主流になっている可能性は否定しない）。

### 3. 何が企画展示の入場者数を決めるのか

前章でも触れたが、H22海藻展（平成22年度企画展「海藻、35億年の旅人」）は、集客という点ではあまり伸びなかった（図5b）。上に記したとおり、これは実際の海藻展の出来栄とはあまり関係がない。海藻展のアンケート結果を見るかぎり、「知人等の紹介で展示を知った」は全体の15%程度にすぎなかったし（SNS等のソーシャルメディアは当時なし）、また「全体的な感想はどうだったか」という設問に対し、「非常に満足」「満足」を合わせた高評価の回答は全体の8割を超えているからである（逆に「不満」あるいは「非常に不満」と答えた低評価の回答は5%未満）。それでは実際に来館しなくても見られるもの、たとえばポスター・チラシの出来栄が悪かったのだろうか。図6にH22海藻展、およびH21多様性展（平成21年度企画展、生物多様性1：生命のにぎわいとつながり）で配布されたチラシ図柄を示した。

どうだろうか。図柄的な良し悪しについては主観が入るので差し控えるが、筆者の目にはよい出来栄であるように思われる。おそらくプロの美術家によるものと思われるが、少なくとも鉄道展やうめもも展のチラシ（図4）と比べると、遥かに凝った図柄であることは確かであるし、チラシから得られる情報量も海藻展および多様性展のほうが格段に多い。にもかかわらず、これらの展示の入場者数は、鉄道展やうめもも展よりも低かった。H21多様性展は土日祝平均においてR1うめもも展①と同程度だったし（図5b）、H22海藻展は平日の人数まで含んだ1日平均においてすらH30鉄道展より下だった（図5a）。海藻展および多様性展は夏の展示、対して鉄道展



図6. 平成22年度海藻展と平成21年度多様性展の配付チラシ。



およびうめも展は春の展示であったにもかかわらず、このような差が生じている。以下は推測だが、H22海藻展とH21多様性展は、展示タイトルやチラシ図柄から想起される内容が学術的すぎて「難しい」と思われた可能性がある。あるいは「海藻」「生物多様性」といったキーワードが、世間の人からみて興味の薄いものであったからかもしれない。平成22年頃と現在とでは情報発信の方法も異なっているが、R1ほにゅうるい展のアンケートを見るかぎり、来場者が企画展示を知る手段は令和元年においてもポスター、チラシ等、従来型の広報手段が主流といえる(表2)。

上の推測を他の展示テーマにも広げるため、図5bにリストアップされた企画展示をA群からD群までの4群にわけてみた。A群は土日祝平均の値が400人/日以上、同じくB群は300～400人/日、C群は200～300人/日、D群は200人/日以下を表している。このうち当館で実施された企画展示の半分以上を占めるC群については、更なる細分は明確な境界を認めにくいので行ってないが、グラフ右側の上位グループと左側の下位グループを見たとき、おおまかな傾向はあるように感じられる。総じてA群、B群、およびC群の右半分くらいまでの「土日祝平均の値が高かった展示」に関しては、館外の市民からみて魅力的と思われるキーワードが並んでいる。対してC群の左半分からD群にかけては、一般的な関心呼びにくいとまで

は軽々に判断できないが、やや学術的な用語が並んでいる印象は否めない。

両者の違いをひとことで言うなら、「市民の側が見たい展示」と「制作者の側が見せたい展示」といえるかもしれない。A～B群の企画展示が多数の来館者を集めた理由は、タイトルに含まれるキーワードが開催時に社会で流行していたものが多いことから(奥田, 2018; 2019)。「市民の側が見たいもの」であったからだと思われる。対してC群の左側からD群にかけては、(館外の市民が見たくなかったかどうかはわからないが)展示担当者の専門あるいは館側の諸事情からくる「制作者の側が見せたい展示」になっていたのかもしれない。むしろ、制作する側は与えられたテーマの中で最善を尽くして展示を作るのだが、来館しない人が実際の展示を見ることはない。チラシ・ポスターに記された展示タイトルおよび短い説明が、館外の市民にとっては得られる情報の全てとなる。チラシ類の図案についても、美術的に手の込んだデザインを工夫するだけでは、館外の市民が展示タイトル等から感じる“学術的な難しさ”を払拭するには至らないのかもしれない。

なお、社会における“流行”が展示入場者数に及ぼす影響については、奥田(2018, 2019)で詳細に検討している。平成19年度以降に高い入場者数を示した企画展示については、「恐竜」「外国産昆虫」「深海魚」「妖怪」「刀剣類」

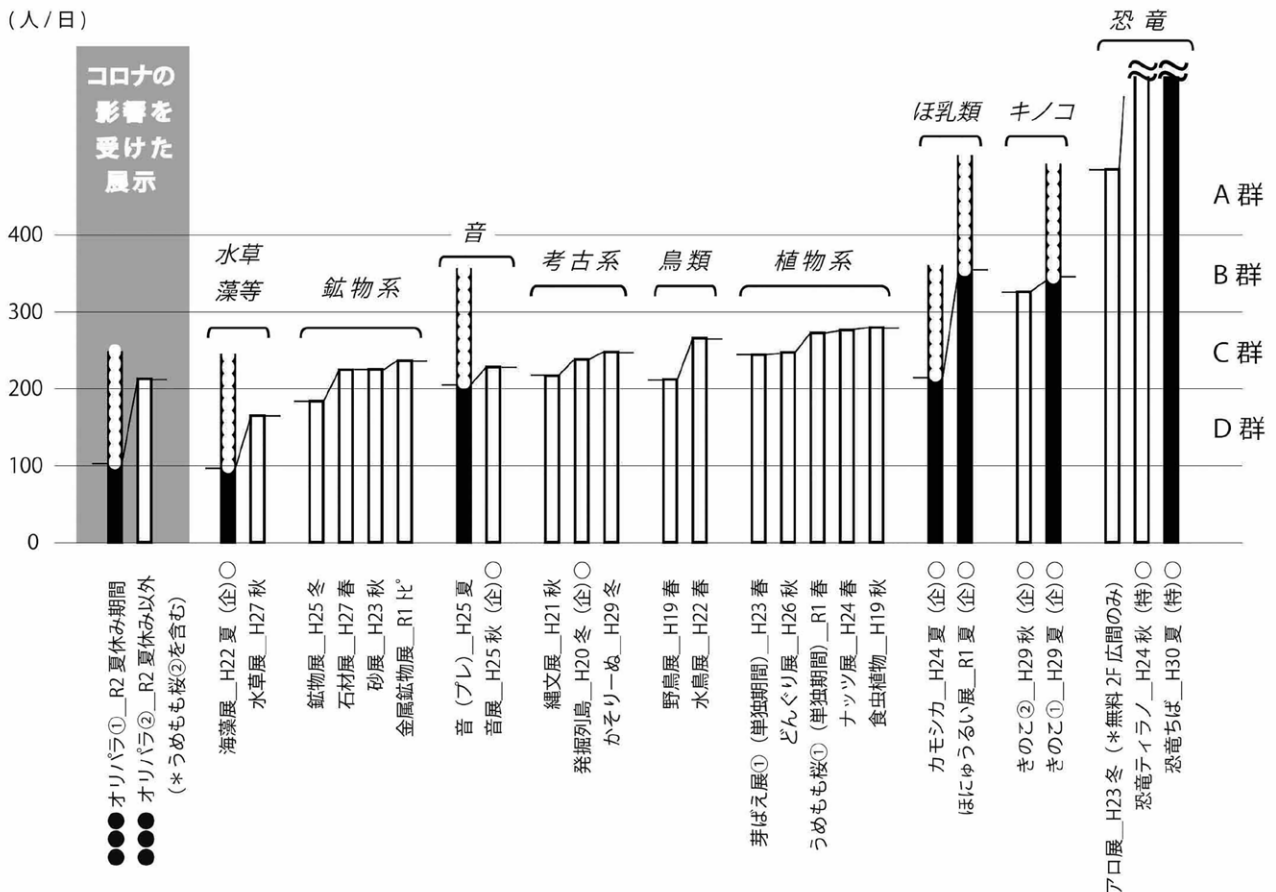


図7. 図5bから抜粋したおもな企画展示の集客比較。横軸は土日祝平均。黒棒は夏の展示、白棒は季節展(秋～春の展示)。白い太点線は夏の展示に乗る150のゲタ値。

「チーバくん」など、展示開催時に市民の間で大きな流行がみられたテーマが上位を占めていることから、「市民の側が見たい展示」が多くの入場者数を得ているという考察を強く支持する結果となっている。

以上のような統計データを検討するたびに感じるのは、「企画展示の入場者数は、展示タイトルを設定した時点であらかた決まっているのではないか」ということである。図7は、図5bのグラフからテーマ的に類似すると思われる展示を抜き出してグルーピングした。明らかに類似物が見つからないオンリーワンの展示は拾えなかったが、図7を一瞥してわかるとおり、テーマごとに有意な傾向があるように感じられる。恐竜に関する企画展示は過去に3回行われたが（H23アロ、H24恐竜ティラノ、H30恐竜ちば）、入館者数では常にA群を占めている。きのこに関する展示は平成29年度に2期に分けて行われたが、夏および秋という異なる季節にまたがっていたにもかかわらず、「150」のゲタ値を補正した結果は、驚くほど似ている（きのこ展①の土日祝平均は491-150=341人、きのこ展②は326人）。維管束植物については、平成19年度からの14年間に約5回が行われたが（H19食虫植物、H23芽生え、H24ナッツ、H26どんぐりなど）、土日祝平均の値では常にC群の中ほどに集まり、年度を問わず安定している。令和元年度のうめもも展も、オリパラ展と会期が重なる期間を除いて集計するならば、ほぼ同じ集客域（C群の中ほど）に入ってくる。

考古学分野については、図7では巡回展以外の企画展示を計3点示したが（H20発掘列島、H21縄文、H29かさりぬ）、いずれもC群のやや下方で安定している。音声学の展示に関しては、平成25年の夏と秋で人数がまったく違うように見えるけれども、夏の展示から150のゲタ値を除いてみると、驚くほど類似した値に回帰する。地学については、鉱物に関連した企画展示をまとめてみると（H23砂、H25鉱物、H27石材、R1金属鉱物）、おおむねC群のやや下方を推移している。H22海藻とH27水草は、対象とされる生物群は分類学的に明らかに異なるグループだが、館外の市民からみると同じに感じるのかもしれない。このように土日祝平均の値で見ると、企画展示の入館者数は分野ごとによく似たレベルに回帰する。実施年度も、季節も、展示担当者もほぼ毎回変わるにもかかわらず、同じような入館者数が記録される。企画展示の入場者数は対象とするテーマによってほぼ決まると感じるゆえんである。

とはいえ、現実には展示担当者の専門あるいは館側の諸事情から「このテーマでやらねばならない」という事態は頻繁に起こり得る。県立博物館が推進すべき研究テーマの多様性という観点からも、図5b～図7において左側方向に来る項目を展示テーマとして選べないとなると、運営的な問題も出てこよう。図7を再度ご覧いただきたい。本図において筆者の予想と大きく異なる結果を示したのが、令和元年度に実施されたほにゅうるい展であった。実は筆者は当初「ほにゅうるい展示の集客は、よくてC群の中程度だろう」とみていた。なぜならH24

カモシカ展（平成24年企画展シカとカモシカ～日本の野生を生きる）について、土日祝平均の値（359人/日；表1）から150のゲタ値を除くと「209人/日」となり、C群の下限に近い値を示していたからである（図7）。展示テーマによってあらかた集客が決まるならば、ほにゅうるい展もこれとよく似た結果になるはずだが、いざ蓋をあけると、ほにゅうるい展の入館者数は土日祝平均で502人/日となった（表1）。ここから「150」のゲタ値を引いた値は352人/日となるので、これはB群の中でも上位といえる結果である（図5b、図7）。

この原因が広報環境の変化によるものであったとは考えにくい。近年ではSNSが広く利用されていることは事実だが、カモシカ展の時代にもtwitterはあったし、市民が運営するブログ上でもすでにカモシカ展は複数のサイトで紹介されていた（当館に関連したブログ及びtwitterの運用開始は平成23年8月）。また、平成24年のアンケート結果をあたっても、「カモシカ展を知ったきっかけ」に対する回答は、ポスター・チラシ55%、「インターネット」12%、知人からの口コミ12%など、R1ほにゅうるい展のアンケート結果（表2）とよく似た傾向を示している。違いとしては、「SNS」の項目がカモシカ展の頃にはまだなく、代わりに新聞・雑誌・行事案内・県民だより・以前来館・その他の項目の合計が20%とやや多かったことくらいである（R1ほにゅうるい展では、上記6項目の合計は12%）。このように、令和元年度でもSNSの効果は全体の1割前後にすぎなかったもので、広報環境の変化がカモシカ展とほにゅうるい展の入場者数の大きな違い（図7）を生んだとは考えにくい。

では、H24カモシカ展とR1ほにゅうるい展の間では、何が違ったのだろうか。令和元年度においても20%程度であった口コミおよびSNS等の影響（表2）を除くなら、まだ展示を見ていない人が「行く/行かない」を決める判断材料は、ポスター・チラシ、当館ウェブサイト、行事案内、県民だより等で紹介される広報物に限られる。物理的に考えられる要因はチラシの配布先および配布枚数が同じでない点だが、ほにゅうるい展で作成・配布したチラシは10万枚であったのに対し、カモシカ展のチラシは12万枚であったので、チラシの配布枚数についてはH24カモシカ展のほうがむしろ多かった。また配付先についても、カモシカ展・ほにゅうるい展ともに千葉市内の過半数の小学校の全生徒に配布しているため、両展示の間で大きな差異は見られない。

明らかに認められる違いとしては、R1ほにゅうるい展が子供を含めた一般市民に広くアピールしていた点が注目される（図1参照）。H24カモシカ展の内容は、現在もアーカイブとして残る広報用ウェブページ（落合、2011）で確認できるが、見栄えのする大型剥製標本の写真は掲載しつつも「電波発信機等、青森県下北半島での研究成果に基づき、シカとカモシカの分類・分布・形態・生態などについて徹底比較し、シカの食害問題等についても考察する学術展示」であった。この説明を読めば、H24カモシカ展は動物行動学に関心の高い層を対象とし



た内容であり、一般市民にはやや難しいという印象を受ける。対して、R1ほにゅうるい展は、タイトルの後に付されたキャッチコピーあるいはチラシ図柄（図1）からわかるとおり、子供へのアピールを強く前面に押し出した展示であった。ここに、さらに事前広報としてウェブページ上にアップしていた「世界の珍獣、動物園の人気者も大集合！」といったフレーズも加わることで、小学生連れの親子らと呼ぶことができたのではないと思われる（H24カモシカ展の入場者の年齢構成は小学生が30%、対してR1ほにゅうるい展の入場者に占める小学生の割合は56%）。

以上は、今後に当館で企画展示を担当する職員にとっては希望が持てる情報といえる。たとえ過去の事例から「多くの来館者は望みにくいかもしいれない」と予想されるテーマでもあって、ターゲットとする来館者層を明確にしてチラシ等でアピールするなどの工夫をすれば、D群からC群、あるいはC群からB群にランクアップさせるなど、入場者数の増大は可能と思われるからである（図5b, 図7）。ターゲット層に対する熱いアピールは、実際に陳列する展示物の中よりも、事前の広報媒体（予告ポスターや配付チラシ）の中でするのがよいようだ。まだ来館していない市民が展示を見に行くかどうかの判断は、口コミ、SNS等のソーシャルメディアよりも、ポスター・チラシ・ウェブサイト等により行われることのほうが、現在においても主流だからである（表2）。来館しない客が実際の展示会場に入ることにはないので、展示の目玉は本番まで取っておくのではなく、とにかく前のめりにアピールしていくほうがよいと思われる。

ただ、そのような工夫を行っても、A群～D群の区分において展示入場者数を2ランクアップさせることはさすがに難しい。C群～D群に分類される展示テーマでA群の入場者数を狙うことは、広報等に大きなコストをかけたとしても困難であろう。恐竜展クラスの入場者数を得るためには、展示開催時に社会において流行している題材を選ぶなど、最初から相応の展示テーマを選ぶ以外にはない。その一例が図5bの中でも上位に位置するテーマ群であることは、奥田（2018; 2019）でも示したとおりである。

なお全体的な傾向として、学術的な色を前面に出しすぎると、展示入場者数は伸びない傾向が認められる（たとえば平成30年度秋の展示「房総丘陵はすごい 一調べてびっくり、新発見の数々」など；図2および表1）。H22海藻展やH21多様性展についても、広報物における学術的な色合いが強すぎたことが、入場者の減少に結びついた可能性がある（図6参照）。専門用語や英単語の類（カタカナ英語も同じ）は、少なくともポスターやチラシの中では使わないほうがよいかもしれない。館外の市民が展示を見るために来館するかどうかを決めるのは口コミ等ではなく、現在においてもポスター・チラシ等が主流なので（表2など）、多くの市民が来場するかどうかは「実際の展示が優れているどうか」よりも、配布チラシまたはポスター等から得られる印象が面白そうかどうか（言

い換えれば、難しそうでないか）が効いていると思われる。説明しなくても市民が面白いと理解できるような“流行のテーマ”が選ばれていれば話は別だが、ポスター・チラシ等の広報物にはなるべく一般の人にも伝わる易しい用語、親しみやすい表現を使うことが（図1, 図4など）、学術的な内容の展示でも多くの入場者を得る秘訣であると思われる。

#### 4. 入館者データの予測と検証

以上、統計データに関する考察を述べてきたが、将来的な入館者数に関しては前報（奥田, 2019）で幾つか予測を試みたので、2年経った今、予測が実現したかどうかを評価するのは責務と思われる。以下、予測内容と実際の結果を併記する。

（予測1）年間入館者数を比較するにあたり、前報の執筆時期が年度途中（平成30年10月）だったため、平成30年度下半期（10月～3月）の本館入館者数（券売所通過人数）は「23,188人」と予測した。従って、平成30年度を通じた年間の本館入館者数は、上記の予測値に上半期の確定数を足して「89,903人」と算出した。また、これに生態園および連携など外数を加えた平成30年度の総入館者数は「154,907人」と予想した。以上はグラフ作成の必要上、平成30年10月に行った予測値である。生態園の下半期における入園者数については、年度後半に大型展示のあった平成20, 23, 24, 29年度を除く7年間の下半期平均をとる形で予測した（奥田, 2019の図10）。

（結果）予測の半年後に確定した平成30年度下半期の本館入館者数は、「25,560人」であった。従って、同年度を通じた通年の本館入館者数は「92,275人」で確定した。また、これに生態園および連携など外数を加えた平成30年度の総入館者数は、「154,482人」で確定した。

よって、平成30年度下半期および通年の本館入館者数については、 $25,560 - 23,188 = 2,372$ 人の増となり、予測値からの誤差は母数の9.3%に留まった。また、これに生態園および連携など外数を加えた平成30年度の総入館者数については $154,482 - 154,907 = 425$ 人の減となるので、予測値からの誤差は母数の0.28%にすぎなかった。総じて、平成30年10月に行った同年度下半期の入場者予想はまずまず適正であったと評価できる。

（予測2）「平成元年の開館以来の累積入館者数が500万人に達する日は、平成31(2019)年7月中と思われる」（奥田, 2019；106ページ）。この予測は、500万人達成の際に行うよう求められていた記念式典の実施日を予想するため、同じく平成30年10月時点で行ったものである。平成元年の開館以来、当館の総入館者数の累積値は平成30年9月末時点で4,891,147人であったので、これに平成30年度下半期の予想値および平成31(2019)年度上半期の予想値を加算する形で、累積入館者数が5,000,000人に達する日を概算した。

(結果) 開館以来500万人目の来館者が当館を訪れ、500万人達成記念式典が開催されたのは令和元(2019)年8月4日のことであった。「7月中」と「8月4日」はほぼ誤差の範囲内と言えるので、ここでも予測は適正であったと評価できる。なお、この予測を行ったのは達成当日の10ヶ月前(平成30年10月)であったので、予測期間から導かれる推定誤差は2%程度の僅差となった。

(予測3)「平成15年に193,324人を記録して以来、当館の入館者数は減少傾向にある。平成30年の総入館者数は15万人前後と予測されるが、次年度以降の入館者数は減少し、職員がいかに努力しても平成30年度の値を回復することは難しい」(奥田, 2019の図10)。平成30年度の特展が“恐竜”であったのに対し、令和元年度の企画展テーマが“哺乳類”であったことから、このような予測を行った。なおこれは、分野ごとに固有の入館者傾向に加え、平成15年頃から一貫して続けている総入館者数の減少傾向も加味した予測である。

(結果) 平成30年10月に行った予測から1年半後、令和元年度の総入館者数は「108,751人」で確定した。平成30年度の総入館者数は154,482人であったので、「令和元年度の入館者数は減少する」という予測自体は当たったが、予想の幅を遥かに超えた大きな減少量となった。

筆者自身に関しては、令和元年度の総入館者数はこれほど減らず、12万人程度になるだろうと予想していた。分野ごとに固有の集客力(図7)から類推すれば、R1ほにゅうるい展における入場者数の減少予測は、H30恐竜ちば展と比べて35,000人あまりが妥当とみていたからである。ところが、すでに述べたとおり、ほにゅうるい展の入館者数は予想に反して多かった。最終的に平成30年度上半期の総入館者数が98,389人であったのに対し、令和元年度上半期の総入館者数は「68,227人」で確定した。これは筆者が予想した減少量より約5000人小さな値で、令和元年度の上半期は、前年度上半期と比べて「30,162人」の減で収まった。

にもかかわらず、冒頭でも述べたとおり、令和元年度の総入館者数は、年間では「45,731人」の大幅減となった(前年度比70.4%)。即ち、令和元年度の下半期だけでさらに15,569人の減少が発生した。いったい何が起きたのだろうか。同年秋、複数の台風被害が千葉県を襲ったのである(令和元年度房総半島台風、令和元年度東日本台風)。

詳細は次章で述べるが、以上のように、博物館の入館者数というものはある程度、予測できる。再三述べてきたとおり、季節および曜日ごとの入館者数は、すでに定められた社会側の制度(学校や会社が休みかどうか)に大きく影響されるからである。また博物館側が実施する企画展示についても、テーマごとの集客レベルは概ね決まっており、年度、季節、展示製作者が変わろうともほとんど変動がみられないからである。極論すれば、翌年

度の企画展示タイトルおよび会期が確定した時点で、翌年度の総入館者数を推定できるほどである。むしろ、予測は予測にすぎないのでぴったり合うわけではない、R1ほにゅうるい展のような(嬉しい)誤算が起きれば、予測が大きく外れる事態も起こり得る。とはいえ、外れた理由を特定して次回に生かせば、予測の精度を上げることはできるだろう。さすがに来年度(令和3年度)に関しては、社会状況が読めないで全く見通しが立たないが、コロナ禍が終息した後においては、入館者減などの兆候を前年度のうちに感知できれば、展示会期や開館スケジュール等を組み直すことにより、入館者減を和らげるための対策を事前に講じることも出来るようになるはずだ。

## 5. 本館に生態園などを加えた総入館者数

当館における“総入館者数”(本館2F入場者数に生態園、本館1Fほか連携など外数を加えたもの)の推移を図8に示す。平成元年度の開館から令和2年度末までの総入館者数の推移を折れ線で示し(図8a、R2の下半期は予測値)、入館者数の内訳が残っている平成19年度以降については、本館2F(①上半期・②下半期に細分)、生態園、連携など外数(本館1F入場者数を含む)に棒グラフで細分した(図8b)。同じく、平成19年度以降における生態園だけを抜き出した入園者数の推移を折れ線で示した(図8c)。

本図で最初に目が行くのは、令和元年度における総入館者数の急激な落ち込みである。冒頭でも記したとおり、平成元年度の開館以来、当館の総入館者数が前年度比70%台を示した年は、他に平成21年度、平成26年度、平成29年度の3度しかない。ほにゅうるい展と鉄道展の好調にもかかわらず令和元年度の入館者数が激減した理由は、大きく2つある。(1)前年度における恐竜ちば展の入場者数が突出して多かったこと。(2)、2019年9月から10月にかけて台風15号および19号が房総半島に上陸し、県下に甚大な風水害をもたらしたこと。関東地方における主要他館(茨城博、神奈川博、群馬博など)の入館者数が前年度比90%前後であったにもかかわらず(ミュージアムパーク茨城県自然博物館, 2019; 神奈川県立生命の星・地球博物館, 2019; 群馬県立自然史博物館, 2019)、当館のみが70%となった原因は、主にこの2つの理由によるものであり、これで令和元年度における減少量(30%)のうち20%が説明できる。

なお、台風15号および19号による影響は、本館よりも生態園などの屋外施設に大きな影響を及ぼした。台風被害のあった令和元年10月の入場者数は、本館では前年度比86.7%であったのに対し、生態園では前年度比53%となっている。なお同年9月の数字でみるならば、生態園の入園者数は「前年度比26%」という大幅な減少になっている。これは台風15号の千葉市上陸による臨時休園が13日間に及んだことが原因であり、臨時休館が台風通過直後の2日間のみ留まった本館では、入館者数は「前年度比43.7%」という比較的高い値に留まっている。



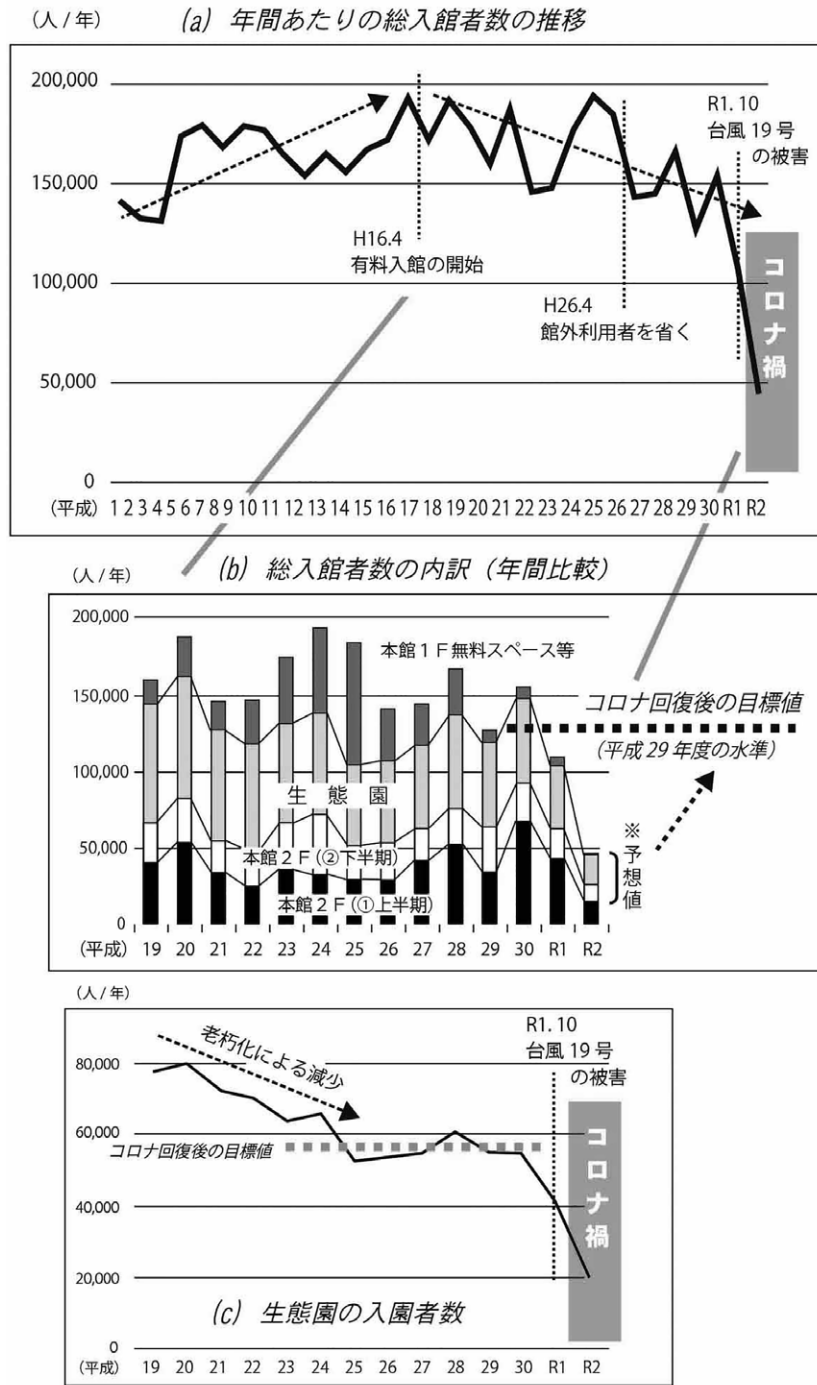


図8. 県立中央博物館の総入館者数. (a)平成元年の開館からの推移（総入館者のみ）. (b)平成19年度からの電子データ（本館，生態園，連携外数の内訳を表示）. (c)生態園の入園者数の推移. 令和2年度の値は同年10月時点における予想値. (bは奥田, 2019図10aに情報追加)

なお、令和元年および平成30年の9月はともに企画展期間に掛かっているため（図2）、台風被害は「R1ほにゅうるい展の入場者数の前年度比（%）」に影響を与えている。とはいえ、恐竜ちば展とほにゅうるい展の9月の入場者数は1日平均、土日祝平均のどちらで見ても2倍以上の開きがあるため（表1）、台風被害がほにゅうるい展の入館者減に及ぼした影響は、多くて見積もっても10%前後にすぎなかった（令和元年7月および8月の値のみでも、本館入場者数は台風被害がなかったにもかかわらず前年度比55.9%および46.8%まで減少）。以上は、H30恐竜ちば展がいかに集客の面において突出していたかを示

す数字でもある。まとめるなら、令和元年9月には台風被害の影響があったにもかかわらず、本館には例年の9割前後の人数が来館していた。一方、生態園は13日間も臨時休園があったため、例年の5割未満の人数しか来援していなかった。

以上は台風被害のあった秋季の入場者数についての検討であるが、それでは、令和元年度における総入館者数の減少30%分のうち、残り10%の減少はどこから生じたのであろうか。この10%分の減少に相当するのが、関東地方の主要他館に共通していることから分かります。令和元年度末から本格化した「コロナ休館」である。

当館ではコロナ禍による臨時休館は2020年3月3日から始まったが、当館では3月の一ヶ月間の入館者数は例年10,000人前後であるので、令和元年度に期待されていた総入館者数の約1割が、3月3日からのコロナ休館によって失われたことになる。

言うまでもないが、コロナ禍の影響は、翌年にあたる令和2年度のほうが大きい。新たに約2万人の入館者が4月1日～5月25日のコロナ休館によって失われたが、再開館後も団体受入等の制限により、6月における平日の入館者数は30人台まで落ち込んだ(図2)。令和2年度上半期の総入館者数(本館に生態園などを加えた値)については、4～5月の合計がわずか「1961人」にすぎず、6月以降は月5000人ペースで推移したが夏休み期間中もほとんど伸びることはなかったため、9月末までの令和2年度上半期の合計は「25,455人」で確定した(注:令和2年度における小学校の夏休みは、コロナ禍による遅れを取り戻すため千葉市内では8/8(土)～8/23(日)の間に短縮)。以上、令和2年度上半期における当館の入館者状況は、入館者が激減した令和元年度と比べても、さらに「37.3%」という非常に低い値となる(図8b)。

令和2年度の下半期については、R2企画展(ちば縄文展)が10月から始まっているのと、昨年度の3月に実施されたコロナ休館が今年度にはないものと仮定すれば、入館者減の著しかった令和元年度下半期と比べて幾らか増えるかもしれないが、とはいえ、通年トータルとしてみるならば、令和2年度の総入館者数は45,000人程度にすぎないと予想される(図8b)。それでも「前年度比約40%」という厳しい数字になるわけだが、今後、秋口から冬にかけてコロナ禍の第3波が到来すれば、ここからさらに減少する可能性もある。

令和3年度以降、当館の入館者数がどのように推移するかについては、コロナ禍の収束が見えないので、現時点では全く予測できない。とはいえ「どの水準まで回復させればよいのか」という目標値を示すことは可能である。この10年間で最高レベルを記録した平成25年頃の水準(図8a)を目指せばよいのかというと、そうではない。平成25年度の総入館者数は184,059人に上ったが、本館2F入場者数(券売所通過人数)の合計値をみると通年で51,322人しかなく、この10年間で最低レベルに近かった。図8bの内訳からわかるとおり、この頃の年度までは館外で実施した出前展示等の集客が当館の入館者数に含められていたからである(図8bでは“連携など外数”として上段に表示)。とくに平成25年は、柏市のさわやかちば県民プラザへの出前展示(江戸風俗図屏風など)により得られた観覧者25,000人が“連携など外数”として当館の入館者数に含められ、同年の中央博物館の総入館者数を押し上げていた。このように、平成25年度においては総入館者数の半数近くを“連携など外数”が占めていた。なお、本館1階(無料スペース)の利用者数も、微小ではあるがこの項目に含まれる数字である。

現在では、このような出前展示への参加者数は当館の入館者数から外すよう統計システムが改められているの

で、平成25年頃の総入館者数(通年で18万人台)を回復させることは、館職員がいかに努力しても難しい。恐竜ちば展が過去最高の成績を取めたはずの平成30年度でさえ、同年の総入館者数をみると15万人台にしかならなかったこと(図8b)も、同じ理由によるものである。なお、その平成30年度の値を回復させることも、恐竜ちば展と同クラスの企画展示を毎年おこなうことは不可能であることを考えると、現実的には難しい。

以上のような理由から、当館がコロナ後の目標にすべき過去の年度は「平成29年度」ではないかと思われる(年間の総入館者数で12万人台)。理由は図8bにみるとおり、平成29年度には“連携など外数”の取り扱いが現在と同じになっているのが一点、また平成29年度の企画展(きのこ展①)については、R1ほにゅうのい展の入館者状況からも読み取れるとおり、広報などの工夫をすれば異なる展示テーマでも追従可能な数字であるのが一点である。入館者の減少が著しかった令和元年度についても、かりに秋口の台風被害と3月のコロナ休館がなかったら、入館者は実際の値よりも2万人ほど増えるので(秋口の増加を約1万人、3月の増加を約1万人と概算)、令和元年度の総入館者数は平成29年度と同等の「12万人台」に落ち着いたはずである。このように平成29年度の入館者状況(図2参照)は、当館が今後参考にすべきモデルケースになり得る。大規模な常設展リニューアルが実現すればともかく、コロナ後に目指すべき総入館者数は、災害などがなく、入館者数の計算法が現在と同じだった平成29年度の水準を目指すのが現実的と思われる。

当館の入場者数においてこの10年、一貫して減り続けている項目がもう一つある。生態園の入園者数である(図8c)。生態園は千葉県立中央博物館に隣接する、房総の代表的な自然を再現した野外博物館であり、平成元年の開館以来、当館への来館者のうち半分近い数を占めてきた(図8b)。その生態園入園者数のみを抜き出した数字は衝撃的ですからある。平成20年頃は年間8万人近くあった生態園の入園者数は、平成25年頃には6万人を割り込み、令和元年度にはさらに減って4万人台にまで落ちている(図8c)。そればかりか、コロナ禍に見舞われた平成2年度の入園者数はさらに減少しており、9月末までの生態園の入園者合計が11,387人であるから、通年合計で考えると令和元年度のさらに半分、2万人台の値まで落ち込む可能性が高い。

以上は深刻な右肩下がりの予測にも見えるが、このうち令和元年度の減少については台風19号など外因による被害なので、1年かぎりの落ち込みですむ可能性が高い。月別データで詳しく見てみると、平成31(2019)年4月から令和(2019)年6月までの生態園入園者数は前年度比で110%前後あったのに対し、7～8月には50%台になり、9月には26%にまで減少している。さらに日ごとデータまで入り込んで調べてみると、令和元年9月には、生態園の総閉園日は15日以上もあったことがわかる(台風による臨時閉園の日数は13日)。その後、生態園入園者数は11月には前年の95%にまで回復し、翌年2月には前年



度比110%台を記録したが、3月3日からはコロナ禍により再度閉園となった。このように、令和元年度における生態園入場者数は突発的な外因による異常値であるので、外因が解消されれば元に戻ると考えられる。

むしろ、生態園において憂慮すべきは平成20年頃から平成25年頃にかけての入園者の減少であろうと思われる。この減少の要因は、平成20年を過ぎたあたりから深刻化した木橋の腐朽あるいは湿原エリアの閉鎖など、生態園の老朽化である可能性が高い。施設の劣化は“内因”であり、年度が変わっても現状ではなかなか解消されないで、生態園入園者数が平成20年度以前の水準にまで回復することは難しい。従って、コロナ禍の後に生態園がめざすべき入園者数の目標値は、平成25年頃から平成30年頃にかけての5万人台が現実的と思われる（よくて平成28年度の6万人台）（図8c）。なお、平成29年度における生態園入園者数をみると、通年合計で「55,039人」となっているので、やはり本館と同じく、コロナ禍後の生態園の回復目標とするには適している。平成20年頃の8万人台を回復するのが理想ではあるが、そのためには園内施設の老朽化など、主な内因を取り除く必要があるため、施設の本格的なリニューアル工事を行わないかぎり難しいと思われる。

生態園来園者数の回復を実現することは、当館にとって重要である。生態園における入園者数は例年、当館の総入館者数の4割近い数を占めており、かりに生態園が閉鎖されれば、当館の総入館者数は「7万人台」にまで減少する（図8b参照）。以上は本館入館者数が平年程度だった平成28年度の話であるから、生態園の入園者数を除いたときの総入館者数は上記のような低い値になるけれども、恐竜ちば展が好調で本館入場者数が過去15年間で最大を記録した平成30年度においてさえ、生態園が閉鎖したならば当館の総入館者数は「9万人台」にしかない。恐竜ちば展の入場者数合計52,745人と比べると（表1）、生態園がH30恐竜ちば展と同程度の入場者数を毎年あげてきたことは、注目されるべきである（とくに平成20～30年度；図8b）。「年間5万人」の入館者を新たに本館だけで確保することはとうてい不可能なので、生態園の維持は当館を存続させる上で不可欠な事業と思われる。

## 6. 埼玉博の入館者データ

以上、前2報（奥田, 2018; 2019）および本稿を通じて、当館の入館者傾向および開館以来の推移について述べてきたが、「それでは他館についてはどうなのか」という問いに答えるために、埼玉県立自然の博物館（埼玉博）の統計データを紹介しておきたい。埼玉博は職員が20名弱であり、都市部から遠く離れた埼玉県北西部の長瀨渓谷（図9a）にあるなど、当館とは立地条件が大きく異なる面もあるが、入館者動向については不思議と当館に似通った点が多く、比較対象として興味深い。

図9bに、埼玉博における年間入館者数の推移を示す。昭和56年に“埼玉県立自然史博物館”としてオープンし

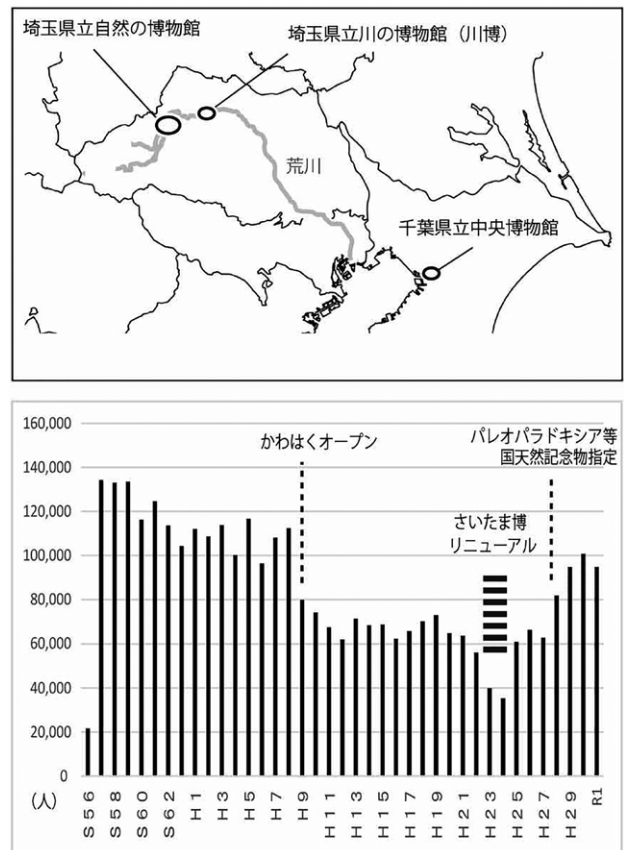


図9. 埼玉県立自然の博物館（埼玉博）の年間入館者数の推移。

た埼玉博は、翌年から長瀨渓谷周辺の化石や地質、動植物を紹介することで年間10万人を超える来館者を集めてきた。ところが、埼玉博の統計データを提供いただいた北川博道学芸員の解説によれば、平成9年に“かわはく”こと埼玉県立川の博物館（当時の名称はさいたま川の博物館）が同じ県北西部にオープンしたことに伴い、かわはくに集客を奪われる形で年間の入館者数が8万人台にまで減少した。その後、平成18年に“埼玉県立自然の博物館”へ再編改修した後もじわじわと減り続けたことから、平成23年9月から1年がかりのリニューアル工事を行ったところ、劇的なV字回復が実現した。

とはいえ、ご提供いただいた統計データを元にグラフを作成したところ、平成24年秋のリニューアル・オープンから3年ほどの間は、埼玉博の入館者水準はリニューアル前と同程度で推移したようである。平成25年度から27年度までの日ごとデータ（補表1）は、平成21～22年度のそれと見比べても区別がつかないほどに通っている。このことは、大規模な常設展リニューアルを行ったからといって、翌年からすぐに大幅な入館者増を見込めるとは限らないことを示唆している。埼玉博の入館者数が本格的なV字回復を遂げたのは、統計データによれば常設展リニューアルから3年後、平成28年のことであった。同年3月1日、埼玉博所蔵のパレオパラドキシア化石とクジラ類化石および秩父地域の露頭群が「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」として国天然記念物に指定された。するとその後、5月の連休頃から埼玉博の来館者は急増し、平成28年度には通年で8万人台を記録した。

これは、埼玉博の近隣に“かわはく”がオープンして以来20年ぶりの数字であったが、その後も来館者は増え続け、平成30年には10万人台を回復、現在に至っていることが統計データから読み取れる。

このうち平成21年度からは埼玉博でも入館者データが電子化されたため、有料/無料人数の別（中学生以下、65歳以上などの年齢構成）などを日単位で確認できるようになっている。平成21年度以降における埼玉博の日ごとデータをまとめた補表（巻末）をみると、やはり週末に入館者が多く平日には少ないこと、とくに5月の連休および夏休みに入館者が増加することなど、当館と共通する傾向が認められる。さらに埼玉博では、土日に来館者が急増して平日に減少する週単位のサイクルが当館と比べても顕著であり、平成23～24年におけるリニューアル工事後はむしろ振幅が大きくなっている。このことは、平日に来館者が少ないのは当館だけの事情でなく、県立の自然誌博物館には一般的に見られる現象であることを示唆している（非公式ながら、他に分館海の博物館や群馬博でも同様の現象を確認）。この現象は、常設展示等の良し悪しといった館側の事情というよりは、学校や仕事等がある博物館に来られないという社会側の事情によるものであるため、平日に新規のイベントを企画するなどして個人入館者数を増やそうとするのは、経営の観点からはあまり意味がないように考えられる。なお、小学校団体の受入を増やす努力は大いに意義があり、こちらは平日の入館者増に直結する。

一方、当館との違いを探すとすれば、埼玉博における集客の通年パターンが年度を問わず安定していること、全来館者における有料入館者数（補表の中にグレーで表示）の割合が当館と比べて高いことなどが挙げられる。その他、例年11月14日に集客上の特異日があること（注：この日は埼玉県民の日として入館料が無料になる）、11月中旬～下旬の紅葉シーズンに来館者が増加することも当館との違いと言えるだろう。なお、埼玉県民の日に埼玉博を訪れる市民の数は当館の比ではなく、3000人を超えた年もある（平成29年11月14日の3007人）。平成24年頃から平成28年にかけてのV字回復については、当館がコロナ禍から回復する際の動向と似ていると思うので参考になると思われる。また今後当館が常設展示リニューアルを行う上でも、補表1は貴重な先行事例になり得るので、比較データとして活用できる。

## 謝 辞

本稿を執筆するにあたっては、千葉県立中央博物館前館長である望月賢二氏にはひとかたならぬご配慮をいただいた。教育普及課の丸山啓志氏には当館の平成30年以降のデータをいただくとともに、コロナ禍の影響について議論いただいた。埼玉県立自然の博物館の北川博道氏には、埼玉博の集客動向について数々のご助力をいただくと同時に、入館者データを提供していただいた。千葉県立中央博物館元副館長である中村俊彦氏、分館海の博

物館の元分館長である宮田昌彦氏、企画調整課長の島立理子氏、植物学研究科の水野大樹氏、教育普及課の下稲葉さやか氏、そしてデザイナーのウチダヒロコ氏には過去に製作した展示に関わるチラシ画像の掲載許諾をいただいた。哺乳類展プロジェクトチームにはアンケート結果をご提供いただいた。また、下稲葉さやか氏には本稿の内容について数々のご助言をいただいた。以上の方々には厚く御礼申し上げる。

## 引用文献

- 群馬県立自然史博物館. 年報2019（令和元年度）. 132 pp. 群馬県立自然史博物館, 富岡市.
- ミュージアムパーク茨城県自然博物館. 2019. [OpenData]ミュージアムパーク茨城県自然博物館年度別入館数. [https://www.pref.ibaraki.jp/kikaku/joho/it/opendata/od-02/20190331\\_nenndobetyuukansyasuu.html](https://www.pref.ibaraki.jp/kikaku/joho/it/opendata/od-02/20190331_nenndobetyuukansyasuu.html).（最終閲覧日：2020年10月31日）.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館. 2019. 神奈川県立生命の星・地球博物館年報第25号（2019年度）. 110 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館代表 平田大二, 小田原市.
- 日本経済新聞電子版. 2020. 4連休の人は「コロナ後」で最高が目立った. 9月23日付電子版.（データ出所：ドコモ・インサイトマーケティング）.
- 落合啓二. 2011. 平成24年度 企画展「シカとカモシカ」おもな展示内容. <http://www2.chiba-muse.or.jp/www/NATURAL/contents/1524617897759/index.html>.（最終閲覧日：2020年10月31日）.
- 奥田昌明. 2018. 平成19～28年度の入館者統計データに基づいた、中央博物館本館における常設展リニューアルの必要性ならびに方向性. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 14(1): 47-64.
- 奥田昌明. 2019. 中央博物館における平成29～30年度上半期の入場者データおよび過去12年間の企画展示 - 企画展と季節展を同じ土俵で比較できる指標の開発と、今後の入館者動向について. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 14(2): 93-108.

## Changes in the Number of Visitors of the Natural History Museum and Institute, Chiba during 2019–2020 – Influence of COVID-19

Masaaki Okuda

Natural History Museum and Institute, Chiba  
955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan  
E-mail: m.okd10@pref.chiba.lg.jp

Analyses and interpretation of the statistics of the number of museum visitors (NMV) are important for exhibition planning and management of museums. This paper reports on the NMV of the Natural History Museum and Institute, Chiba during the fiscal years 2019–2020. The 2019 summer time exhibition on mammals shows the NMV being similar to the 2017 summer exhibition on mushrooms. The 2020 spring exhibitions on plums and cherry blossoms as well as the traveling exhibition on Olympics and Paralympics have severely been affected by the COVID-19 with significant decrease in the number of visitors, but recovering after September 2020. The decrease in NMV during 2019, compared with 2018, was primarily due to the disaster caused by Typhoon No. 19 in Chiba Prefecture, but was secondarily due to the excessive success by the special 2018 exhibition for dinosaurs. The NMV for 2020 is expected to decrease to c.



40,000 but will be able to recover to c. 120,000 that was the NMV in 2017. The decrease of NMV is also serious in Seitaien (Ecology Park), but can be recovered to the level in 2017 similarly. The NMV data of the Saitama Museum of Natural History are shown as an example for comparison with the Natural History Museum and Institute, Chiba.

補表1および2. 埼玉県立自然の博物館の入館者数の日ごとデータ（北川氏からの提供データを奥田が加工）.

